

【事例紹介】

COIL という教育手法の導入

—南山大学の新たな国際化に向けての取り組み—

COIL as an Educational Approach:
A New Internationalization Initiative at Nanzan University

南山大学 国際センター 藤掛 千絵

FUJIKAKE Chie

(Center for International Affairs, Nanzan University)

南山大学 国際教養学部 山岸 敬和

YAMAGISHI Takakazu

(Faculty of Global Liberal Studies, Nanzan University)

キーワード：オンライン国際連携学習、COIL

はじめに

COIL (Collaborative Online International Learning) は、オンライン国際連携学習の手法の一つで、インターネットを使って国境、文化を越えた学びの環境を学生に与えようというものである。ほかにも Virtual Exchange、Globally Networked Learning、Telecollaboration など様々な名称に代表されるように、このような試みはこれまでも多くの教員によって取り組まれてきた。中でも COIL は、アメリカのニューヨーク州立大学が独自に「COIL モデル」を提唱し、Collaboration を強調する点が他の交流手法とは一線を画すとされており、世界的な広がりを見せている。2018 年度に公募された文部科学省「大学の世界展開力強化事業」は、特にアメリカの大学との COIL を推進する事を目的としている。採択された日本の 10 大学は、それぞれの特色を生かしながら取り組みを進めている。本稿では、その 10 大学のうちの 1 つである本学の取り組みを紹介する。

事例紹介

南山大学の COIL を活用した取り組みを、「NU-COIL」と呼ぶ(NU=“Nanzan University”)。本学では、オンラインツールによる交流や協働学習と既存の留学プログラムの融合に着目し、またさらに、留学

後に課題解決型の授業を地元グローバル企業とも連携して行うキャリア教育にもCOILを生かす取り組みを始めている。それを3段階に構成し、ベーシック、アカデミック、PBLとしている(図を参照)¹。



以下、二つの事例を報告する。まず、本学と Queens College, City University of New York のクラスが合同で行なったアカデミック COIL を紹介する。そして次に University of North Georgia への短期留学プログラムと連動させたベーシック COIL の事例を報告する。

<アカデミック COIL の取り組み>

・プログラム概要

このアカデミック COIL は、南山大学で筆者(山岸)が担当する「基礎演習」と、Queens College で Mari Fujimoto 先生が担当する「Introduction to Modern Japan」のクラスで行われた。前者のクラスでは、「外国人としての視点からの日本政治・社会・文化」をテーマに設定していた。COIL はテーマや学問分野が異なった二つの科目で行うことも可能であるが(その方が面白い結果を生むこともしばしばあるとされる)、この COIL は授業内容が類似している二つのクラスで行ったものである。

交流期間は約5週間で、最初に両大学の学生でペアを教員が設定し、お互いにまずメールで連絡をとり、使用する SNS を決定する。そして自己紹介のビデオクリップを送り合うという課題から始めた。プログラムの課題は、日米の学生が協働しながら日本に関する疑問を設定して、それについて日本での聞き取り調査を含めたりサーチを行い、最終的には5分程度のビデオを作成することとした。時差の関係上、相互のやり取りは授業時間内ではなく、自宅学習の時間などを活用して行われた。この課題への評価は、両科目で成績の10%とした。

・プログラムの目的

「基礎演習」に COIL を導入した目的は、4つある。第一は、この科目はもともと活発なクラス内でのディスカッションを含んだアクティブラーニング形式のものであるが、アメリカの大学の学生とも

¹ より詳細な情報は、南山大学の NU-COIL 専用の HP <<https://office.nanzan-u.ac.jp/nu-coil/>>を参照。

ディスカッションを行うことによって、より学生が複眼的な視点を持つことである。第二に、時間帯や文化の違い、それも面識のない他者とプロジェクトを進めていくことによって、卒業後にも必要とされる国際的感覚を高めること。第三に、演習を受講している学生の英語力は、平均すると TOEFL iBT で 60 以上はあり、ある程度の英語運用能力は持っているが、アカデミックな文脈で英語を使用することが少なく、そのためにこのプロジェクトによって自身の英語力に自信を持つということも期待された。最後に、多くの学生にとってこれまでにない経験をすることによって、学問をする上での新たな興奮や楽しさを味わって欲しいということが COIL を導入した目的であった。

・成果と今後の課題

以上に述べたアカデミック COIL を導入した目的は概ね達成されたと考える。南山大学の多くの学生からは、「Queens College の学生から、日本についてこれまで気づけなかった点を指摘されて新鮮だった」、「これまで考えたこともない点について疑問を持ち、それについてアメリカの学生と一緒にリサーチしていく過程はとても勉強になった」などのコメントがあった。連日パートナーと Skype でビデオ電話を繰り返しながらビデオ作成をした学生もおり、当初想定していたよりも概ね活発な交流がなされたと言える。最終課題のビデオからは、それぞれが面白いテーマとリサーチクエスチョンを設定して、日米の学生が協力して制作した様子が伺えた²。

ただ、もちろん全ての学生が活発な交流ができた訳ではなかった。「会ったこともない外国人の学生と交流するのは初めてで、緊張してどのように議論を進めて良いのか分からなかった」というコメントにも象徴されるように、日本人学生の方にはこのプログラムを進めていく上での怖さや戸惑いもあったようである。そのためビデオ作成に本格的に取り掛かるまでにかかなりの時間を要した学生がいた。また両方の学生に途中で連絡が途絶えてしまい教員が介入せざるを得ない状況になったこともあった。

このような怖さや戸惑い、学生個人のモチベーションに関する問題を全て解決することはできないが、教員の工夫によってある程度の問題について対処することができると思う。最も重要なのは、COIL を科目に取り入れることによって、「問題」が起こることは当たり前で、それを克服することが学生にとって学びにつながることを、事前に学生にしっかりと伝えておくということである。

前述したように、このようなことは卒業後に国際的な仕事をする上でよく起こることである。COIL はこれをどのように自分で解決するかを学ぶための場であるという心構えを学生は持つようにすることが重要である。日本人学生の多くは「外国人との交流」と聞くと、「日本や日本語に興味がある学生との楽しいもの」というイメージを持つ。しかし、授業内で成績の一部とされる課題を一定期間内で

² このビデオは Queens College のウェブサイトで公開されている

<http://qcpages.qc.cuny.edu/~mfujimoto/EAST%20131/> (2019年9月16日閲覧)

作成しないとならないようなアカデミック COIL ではそうならないことも多い。このようなことを教員は COIL を開始する前に学生としっかりと伝えることが重要である。さらにプログラムをより円滑に進めるためのより小さな工夫としては、パートナーのメッセージに対しては 24 時間以内に返信するというルールを設定する、全く交流が途絶えてしまうような状況が起こった時のために、「バックアップ課題」を設定しておくなども挙げられる。

<短期留学プログラムと連動させたベーシック COIL の取り組み>

・プログラムの目的

本プログラムは、University of North Georgia への 2 週間の短期留学とベーシック COIL を組み合わせたものであり、2019 年 1 月から 3 月に実施された。参加する学生たちが、事前に留学先の学生たちとオンラインツールを使用して交流をする新しい留学の形である。前述のアカデミック COIL と異なるのは、交流の内容がお互いに学んでいる言語をサポートしあったり、広い意味での文化交流を行ったりするという点である。

本プログラムの目的は、事前に決まった相手と交流することで、言語の壁と、異文化の壁を留学前に可能な限り取り払うことに加え、その学生がバディとなり迎えてくれることによって現地での異文化交流を更に促進させることである。本学からの参加者は、全ての学部から網羅的に選抜され、外国語学部、国際教養学部をはじめ、総合政策学部、経済学部、経営学部まで様々であり、総勢 10 名が参加した。事前の交流には 6 週間ほど費やし、留学期間は約 2 週間であった。事前のオンライン交流に参加したノースジョージア大学の学生は 4 名で、全員が Tomoe Nishio 先生が担当する日本語科目「JAPN3990」を履修している学生であった。南山大学側は、筆者（藤掛）が、事前交流を担当する教員となり、プログラムの引率も行った。

・事前 COIL の設計

事前 COIL を行うにあたり、Canvas という学習管理システム（LMS）を用いることで、双方の教員と学生が共有できるプラットフォームを設け、スケジュールや課題の提出・確認を行った。共通の LMS を使用することの利点は、学生がいつまでに、何を、どのように提出すれば良いかを Canvas 上に記載しておくことで、双方の教員が、双方の学生たちの提出物を確認することが可能となるという点である。Canvas の他には LINE と Skype を併用した。特に Skype は録画機能があるため、学生同士がビデオでディスカッションしている様子を録画し、データとして教員に送信することができる。

事前 COIL の具体的な流れとして、まず、学生のグループ分けをした。North Georgia の学生が 4 名だったため、1 名の学生に対し 2~3 名の本学の学生がグループメンバーとなった。最初の約 2~3 週間は、主に日本語を使用する期間で、Canvas 内に提示された、日本の大学生生活に関する簡単な読み物

(日本語)を全ての学生が読み、North Georgiaの学生は、グループのメンバーに尋ねてみたい質問を準備する。その後、学生たちはSkypeでビデオチャットができる時間帯を見つけて約束し、その時間にグループディスカッションをする。それを録画したものを、データファイルとしてCanvas上に提出をする。毎週末に、その取り組みの振り返りをするために、「どのようなことを話したのか」「何を感じたか」というレポートを書かせる。それも、Canvas上で提出する設計をしておく。続く後半の約2~3週間は、主に英語を使用する期間で、読み物(英語)を読み、本学の学生がそれに関する質問事項を用意し、Skypeで、英語でのディスカッションに臨む。どのような質問をしたいか、事前に簡潔に書いて提出させ、教員が助言を行った。第二言語でのディスカッションとなるため、質問事項も第二言語で用意しているからである。

・成果と今後の課題

今回の取り組みは、短期間の留学だからこそ、意義のあるものとなった。留学に行かなかった学生や、英語能力に自信がない学生も参加していたため、事前の交流において実際に会話をしたりメッセージを交換したりすることが学生たちにとっては緊張を解き、互いを理解しながら仲間意識を築くための貴重な機会となった。日本とアメリカの大学生活には多くの違いがあることに気づき、異なる環境で生活しているという発見がある中で、交流が進むうちに、早く現地でその仲間に会いたいという気持ちが高まっていった。また、言語に不安があった学生も、事前に交流する中で失敗を重ねながら、少しずつ不安を取り除き、また仲間意識が芽生える中で言語能力の不安を打ち消すような安心感が生まれつつあった。これが長期留学であれば、現地に行ってからしばらく時間があり、現地で本人が試行錯誤すれば仲間も自然とでき、それに伴い異文化理解も深まるかもしれないが、短期留学の場合、ともすると期待していたほどの成果が得られずに時間だけが過ぎてしまうことも考えられる。その点においても、事前COILで現地の学生たちとつながりあうことには大きな意味があると考えられる。

参加した学生たちからは、多くの前向きなフィードバックを得られた。事前にオンラインで交流したことで、「パートナーと実際に会ったときに安心感をもって話すことができた」「向こうの環境に自然と溶け込めた」「今回のように事前に交流する機会が今後増えていったらいいと思う」など、概ね良いコメントであった。改善点としては、時差をさらに考慮する必要性が挙げられる。ビデオ通話をグループで毎週行うことは、状況によっては難しいため、必ずしもビデオ通話ではなくビデオ録画を送信するという方法も今後は取り入れることも検討する。また、グループ分けをする時の人数バランスや、言語能力の差をできる限り考慮することで、学生たちがより効率的・効果的に課題を達成していける。最後に、これはベーシックCOILのみならず全てのCOILに共通して言えることだが、パートナー教員との綿密な打ち合わせやコミュニケーションを通して信頼関係を構築しておくこと、発生し得

る問題について議論しておくことは、その授業やプロジェクトを成立させるために重要である。

<NU-COILの現在の進捗状況と今後の取り組み>

本学では、大学の世界展開力強化事業構想調書の中で、COIL科目数を、2018年度には3、2019年度には17、2020年度には30、2021年度には38、2022年度には48増加させていく計画を立てた。2018年度と2019年度については目標を達成している。また2020年度に向けても、COILに関心がある教員を募り、個別に説明するなどして協力教員の裾野を広げていく努力をしている。

COILは、学生にとっても教員にとっても学びが多い取り組みではあるが、セットアップする際に時間を取られ、特に初回はうまくいかないことも多い。そのため、それに対応するために組織的なサポート体制を整えておく方が良いと考える。

最後に、この事例レポートには触れなかったPBL COILについて触れたい。これは、地域における企業や団体、官公庁などをパートナーとして招き、実際の異文化間の問題や課題を提供してもらい、日米の学生がそれらについて考え、解決策を提案するというNU-COILの最終的な目標を象徴しているものである。

最初のPBL COIL授業は、2019年9月（本学における第3クォーター）で実施される予定である。今年度においては、国際産官学連携PBL A、B、Cの3つの授業を提供する。全ての授業において、アメリカの大学との協働学習と、地元グローバル企業等とのコラボレーションが実現する。特にPBL Cにおいては、自動車部品製造会社から課題提供を受け、「未来の車」を学生たちが描いていく。アメリカの学生と本学の学生が協働で話し合いながら、将来どのような車が必要になるか、どのような車なら欲しいかを具現化し、プレゼンテーションビデオを作成する。その他2つの授業においても同様に、地元グローバル企業や在外公館から協力を得ている。学生たちが自ら探求心をさらに深め、海外の大学とつながることで、課題解決能力を備えたグローバル人材として将来世界で活躍できることを願っている。